

J-Pop のイノベーターとしての「非アイドル」グループ に関する一考察～ DISH//、超特急、BOYS AND MEN を中心に

A Comprehensive Study on the “Non-Idol” Groups, DISH//, BULLET TRAIN, and
BOYS AND MEN as the Innovative Performing Artists of J-Pop

増山 賢治

MASUYAMA Kenji

This paper aims to clarify the notable phenomena in J-Pop nowadays, as a new trend brought by the young male group-artists, who are rising with “non-idol” as their catch word. Differentiated from the previous idol-performing artists, the following three boys band-groups, DISH//, Bullet Train, and BOYS AND MEN are especially worthy to note in character, and could be recognized as the subject of this paper, just because they all have characteristics in innovative style and distinctive ways of promotion, music-making, stage performance e.t.c..

It is also remarkable that they are winning nation-wide recognition, rather by fully utilizing the new media like SNS (Social Networking Service) than by persisting in the efforts to appear on the prime-time TV shows, or on the major newspapers or magazines. In this sense, they have brought us a significant source of information for compiling into the history of J-pop with fresh view-points, in order to explore the various kinds of issues, included in the contemporary Japanese entertainment world.

■はじめに 男性（アイドル）グループ戦線異状あり

本稿は、近年 J-Pop の分野で様々な意味で注目すべき活動を展開している三組の若手男性グループ（DISH//、超特急、BOYS AND MEN）を通して、現代日本の大衆音楽・芸能文化の多元的な状況を多角的にとらえ、音楽（J-Pop）、映像（映画・テレビ）、演劇の世界に新しい潮流が出現しつつある事実を示し、その文化的意義の考察を試みたものである。J-Pop の代表的なアイドルグループに対する従来一般的な認識では、AKB48 やジャニーズ系の各グループが一義的に想起されたが、近年はそれと対極的なイメージを持つ EXILE 系グループの活動やアニメソングの急速な台頭、2.5 次元ミュージカルの隆盛に見られるように、アイドルアーティスト（ソロ／グループ）のイメージやあり方に変化が生じて全体に多元化が進み、新しい状況を迎えていると考えられる。

そこで、研究対象である上記男性 3 グループについて、音楽様式から宣伝方式までの各方面に感じられる J-Pop のイノベーターとしての革新性を概観する前に、男性アイドルグループを従来型（旧勢力）と新型（新興勢力）に二分し、それぞれに対する共通認識と思われる基本的要素を挙げ、両者を簡単に比較しておこう。まず、ジャニーズ系に代表される従来型に対する大まかな共通認識

として「歌って踊れる」、「演技もする」、「ヴィジュアルが良い」、「言動が優等生」、ファンとの関係性で言えば「接触する機会、方式がかなり制限されている」などの点が挙げられるだろう。そして、その宣伝方式も定型化されており、テレビ出演は地上波のプライムタイムの時間帯を重視し、出演映画もシネコンのような大手系列の上映館で公開される作品が中心となっている。それから、マスコミへの登場も古くからの知名度の高い新聞や雑誌に集中しており、それは楽曲、すなわち音楽様式とも一定の関係性を有しているものと推測される。また、そうした特徴の一部は裏を返すと、若干の例外はあるものの「歌やダンスは決して上手くはない」、演技に至っては舞台俳優から見れば「素人レベル」、表現性には「羽目を外したようなコミカルなパフォーマンスはほとんど期待できない」といった評価を下すことも可能であろう。それらを本稿ではまとめて「従来型」と呼ぶ。

それに対して「新型」の諸グループは、おおよそ正反対のイメージ戦略によって人気を博しており、今回はその代表として DISH//、超特急、BOYS AND MEN（以下、簡略化された「ボイメン」という通称を用いる）を取り上げた。同3グループは2016年末から2017年初にかけて大規模なライブを行う予定が組まれており、超特急の「BULLET TRAIN CHRISTMAS ONEMAN SHOW 2016 愛す。in Wonder Land」（2016年12月24日、国立代々木競技場第一体育館）、DISH//の「DISH// 日本武道館単独公演 '17 TIMELIMIT MUSEUM」（2017年1月1日、2日、日本武道館）、ボイメンの「ライブ2017 武道館だよ！全員集合！」（2017年1月7日、日本武道館）は彼らの勢いを如実に示すもので、従来型のライブ会場の牙城と目される東京ドーム（ジャニーズ系諸グループが一堂に会して毎年大晦日の晩にカウントダウンライブを行うのが通例となっている）を取り巻くように、まさしく「アイドル戦線異状あり！」の様相を呈している。

本稿は彼ら3グループの出現、活躍をアイドルの在り方を広げる試みという意味で、J-Popにおけるアイドル性を探究、解明する良い機会としてとらえ、パフォーマンス、ライブ、出演イベント、CD特典、付録DVDの内容など、各方面での注目すべき特徴的な事象をピックアップすることを主目的として構成されている。以下、同3グループのキャラ設定やプロモーションから楽曲まで、J-Popをはじめとする大衆音楽・芸能に新たな状況をもたらす可能性を感じさせるイノベーターとしての特性、いわば「(従来型アイドルに対峙する)非アイドルたちの様々な意匠」を主に以下の5つの観点から俯瞰してみよう。

(1) 略歴とメンバー構成、(2) パフォーマンス・スタイル（歌、ダンスからキャラ設定・コスチュームなど）、(3) CD/DVD（PV [プロモーションビデオ、以下PV] 映像、CD付録のDVDの特徴を含む）および楽曲、(4) ライブおよびメディア出演（音楽 [ライブ・イベント]、映像 [テレビ、映画]、舞台、海外公演など）、(5) 宣伝方式（新聞・雑誌およびSNS）

1 DISH//

DISH//の公式HP(2016年版)をベースに略歴とメンバー構成を、最新情報を加えて次に引用する。

DISH//(ディッシュ) 2011年12月に、TAKUMI(北村匠海)、MASAKI(矢部昌暉)、RYUJI(小林龍二)、To-i(橋終生)

の4人で結成されたダンスロックバンド。ギター、ベース、DJを武器に繰り広げるステージは『こんな見たことない・・・』と思わず声が漏れるほど。2012年6月10日に「It's alright!」で待望のインディーズデビューを果たし、グループ名の“ディッシュ＝皿”から連想されたライブ中の皿投げサービスは安定の盛り上がりを見せる。2013年6月19日、Sony Music Recordsより「Can Hear」でメジャーデビュー。2013年4月期テレビ東京系アニメーション「NARUTO -ナルト- 疾風伝」のエンディングテーマソングに起用され、オリコン・ウィークリーチャート初登場9位を獲得。現在、オリコン2位にランクインした4thシングル『サイショの恋～モテたくて～/FLAME』が好評。'15年元日に念願の武道館ライブの開催が決定！2017年の元日の日本武道館ライブで新メンバー“泉大智”（Dr）の加入を発表。

北村匠海 (Vo./Gt) 1997年11月3日生まれ東京出身 矢部昌暉 (Chorus/Gt) 1998年1月9日生まれ東京出身

小林龍二 (RAP/Bass) 1997年1月6日生まれ東京出身 橘柊生 (Fling dish/RAP/DJ) 1995年10月15日生まれ北海道出身

泉大智 (Dr) 1996年6月1日生まれ東京出身

DISH// はライブ中に紙製の皿投げパフォーマンスや寸劇などを交えた独特のパフォーマンスを特色としており、その様子は彼らのライブを収録した一連のDVDなどで確認することができる。そして、2016年にはいわゆるエアバンド（踊る時は楽器を演奏しない）から本格的ダンスロックバンドへと変貌を遂げ、その状況をエンタメ情報サイト「rankingbox」の2016年6月23日の記事は次のように報じている（<http://rankingbox.jp/article/41678>）。

【ライブレポ】DISH//、三位一体のパフォーマンスで真の“ダンスロックバンド”を確立！プレミアムライブで“第三者の目”で厳しく審査！！

今作「HIGH-VOLTAGE DANCER」は、DISH//にとって新機軸となる攻めのエレクトリックチューンとなっており、楽器を“弾きながら”歌って踊る三位一体のパフォーマンスに挑戦。これまで“ダンスロックバンド”とうたっていたが、実際に楽器を“弾きながら”踊って歌うことは難しく、演奏する時は踊らずにパフォーマンスをしてきたDISH//。今年12月に結成5周年を迎える彼らは、本当の意味での“ダンスロックバンド”を確立するべく、練習に練習を重ね、今回のプレミアムライブで実際に楽器を弾きながら歌って踊るパフォーマンスを披露することとなった。

そして、そのことは雑誌インタビュー記事「RELEASE INTERVIEW」（『BOYS ON STAGE vol.10』p.99）でもメンバーが言及しているので次に一部を引用する。

TAKUMI「今までの、演奏する時はダンスと一緒に踊らない、という形態はそれはそれで成立していたんですが、途中から踊りながら、本当に演奏して、誰も見たことのない、誰もやったことのない表現を追い求めていった方が良いんじゃないかっていうことをスタッフさんも含めて話すようになっていったんです。」

RYUJI「ダンスをする時はずっと弾かないで持って踊ることに物足りなさも感じていましたし。（中略）結成して5年ですが、ダンスも楽器も結成した時よりは成長してきているので、準備は整ったかな、と。それをうまく表現できれば僕たちの理想であるダンスロックバンドとして第一線で引っ張っていく、ということに近づくな、と感じます・・・」

CD/DVD や楽曲の概要は DISH// 公式 HP のディスコグラフィに記されているので、詳細はそれに譲ることとし、今回は一部の楽曲についてメンバー自身が語っている記事を基にその特徴の一端を探ってみる。楽曲提供者には小倉しんこう、前山田健一らを中核に、氣志團の綾小路翔、TUBE のギタリスト・春畑道哉やベテラン女性アーティストの大黒摩季、さらに小室哲哉と次々に多彩な人材を迎えており、雑誌『BOYS ON STAGE vol.6』p.34 のインタビュー記事に大黒摩季の作詞、春畑道哉作曲による《イエ〜ィ!! ☆夏休み》の聴き所についてメンバーの発言が以下のように記されている。

TAKUMI 「サビ終わりの“イエ〜ィ!! ☆夏休み PartII” っていうところは聴きどころですね。TUBE さんの名曲を踏襲した上でのフレーズなので、幅広い世代の方たちに『お!』と思ってもらえると思いますし・・・)」

RYUJI 「ラップが独特のノリがあって、最初に聴くと、結構難しそうなんですけど、そのリズムが取れるようになるとすごく気持ちよくなると思うので、そこを楽しんでもらいたいと思いますね。」

MASAIKI 「この曲は TUBE さんが湘南の海を盛り上げているのに追従して、千葉の九十九里を盛り上げよう、ということで、歌詞にもそんな千葉のワードが散りばめられているので、九十九里や浜を想像しながら聴いてもらうのも良いんじゃないかと思います。」

To-i 「さっきも話したように、最初の部分を春畑さんと大黒さんも歌ってくださっているってことで思い入れも深いですし、あのフレーズはスラッシャーにも一緒に歌ってもらいたいです。ライブでみんなで声を合わせたいです。」

主要楽曲の PV は CD 付録の DVD に収められたものもあるが、全般的に YouTube に積極的に公開する姿勢は従来型の男性アイドルグループとの大きな違いとして銘記すべきだろう（公式 HP のディスコグラフィから YouTube の PV に飛べるように設定されている）。そして、当然だがそれらには楽曲イメージとの整合性を配慮した様々な工夫が施されており、メンバーがコミカルな演技を見せている「俺たちルーキーズ」をはじめ、どれも映像的に楽しめる作りになっている。

それから、CD 付録の DVD の収録内容も多岐に及び、PV およびそのメイキングだけでなく国内および海外ツアーの様子も含まれている（下記のカッコ内は収録 CD のタイトル）。

- ・皿組キャンプ 2014 夏 in 東西野音 -PERFECT SUMMER FESTIVAL PLAN- より、大阪城野外音楽堂ライブダイジェスト（『MAIN DISH』）
- ・DISH// とバーチャルデート TAKUMI 編・MASAKI 編・RYUJI 編・Toi 編（『MAIN DISH』）
- ・皿 vs スラ“世界サラ〜級タイトルマッチ”〜2015 春編〜オープニング映像（『イエ〜ィ!! ☆夏休み』）
- ・DISH//2016Spring Hall Tour 『D//RedBlue』 ロードムービー〜 DISH// のぞき見 12 時間!?!〜（『HIGH-VOLTAGE DANCER』）
- ・「D//PINK」 ツアードキュメント（『FLAME』）
- ・台湾キャンペーン・オフショット映像（2013/7/05-07/07）（『晴れる YA!』）

ライブおよびメディア出演のうち、元旦とその翌日の日本武道館でのライブは 2015 年から実施

され、2017 年も同様に開催予定で、夏恒例の全レパートリー 55 曲を披露する東西野音でのライブは 2016 年の 7 月 2 日（大阪城野外音楽堂）と 7 月 18 日（日比谷野外音楽堂）に開催された。そして、DISH// および後述の超特急とともに男性客限定ライブや、各地の学園祭への積極的な出演など従来型のアイドルグループではまず考えられない各種の多彩なライブやイベントを行っていることが目を惹く。男性限定ライブについては、ポップカルチャーのニュースサイト「音楽ナタリー」の 2015 年 2 月 13 日の記事（<http://natalie.mu/music/news/138525>）を以下に引用する。それから、公式 HP の LIVE&EVENT の情報には下記の例のような大学の学園祭イベントへの出演情報が数多くアップされており、同方面への積極的な姿勢が窺える。

DISH// が本日 2 月 13 日、東京・GARRET udagawa にて男性限定ライブ「皿野郎 激烈決起集会～バレンタイン 4649～」を開催した。DISH// にとって初めての男性限定ライブには約 300 名のファンが集結。「サイショの恋～モテたくて～」からライブがスタートすると、場内はあっという間にファンの熱気で充満する。その後も DISH// のメンバーは「踊らにヤソン！ Song！」「皿に走れ!!!!」とアッパーなナンバーを立て続けてフロアをヒートアップさせた。MC では TAKUMI が「今日からお前らは男スラッシャー改め『皿野郎』だ！」と言い放ち、“皿野郎”たちのテンションをさらに高める。明日に控えたバレンタインデーにぴったりな「ギブミーチョコレート！」では、4 人は普段ライブで行っている紙皿投げの代わりにチョコレート客席にばらまいた。そしてアンコール曲「ピーターパンシンドローム」まで全 7 曲を終えると、「絶対このライブを続けていくぞ！」と皿野郎と約束を交わしてステージを去った。

DISH// 「皿野郎 激烈決起集会～バレンタイン 4649～」2015 年 2 月 13 日 GARRET udagawa セットリスト

01. サイショの恋～モテたくて～
 02. 踊らにヤソン！ Song！
 03. 皿に走れ!!!!
 04. ザ・ディッシュ～とまらない青春 食欲編～
 05. ギブミーチョコレート！
 06. FLAME
- <アンコール> 07. ピーターパンシンドローム

- ・名古屋外国語大学、名古屋学芸大学、名古屋学芸大学短期大学部の「第 21 回 合同祭」

日時：2016 年 10 月 23 日（日）開演 16:30 場所：名古屋外国語大学

- ・東洋英和女学院大学 かねて祭『Silent Siren × DISH// Special Live 2016 in Kaedefes』

出演：Silent Siren・DISH//、日程：2016 年 11 月 2 日（水）、開場：17:30 / 開演：18:00

会場：学内 体育館、住所：神奈川県横浜市緑区三保町 32

- ・岡山理科大学 第 52 回 半田山祭 2016

日時：2016 年 11 月 12 日（土）開場：15:30 / 開演：16:00

会場：岡山理科大学内（加計記念第 2 体育館）1200 名（イス席）

また、一風変わった催しとしてプロレスの試合と音楽ライブを交互に実施する DDTI フェス（DDT2016supported by ナタリー、11 月 6 日、15:00～新木場 STUDIO COAST）への出演もあり、その他海外進出に関しては初の海外ライブの台湾ツアー（2013 年 7 月 6 日）やアメリカのコロラ

ドで人気ボーイズバンド After Romeo の全米ツアーのオープニングにも登場した（現地時間 2014 年 9 月 13 日）ほか、バンコクでのアイドルコンサート「アニメアイドルアジア（2015 年 4 月 29 日）」とポップカルチャーイベント「タイランドコミックコン（2015 年 5 月 1～3 日）」に出演した様子をタイ旅行やタイ生活とタイエンタテインメントのポータルサイト「タイハイパーリンクス」の記事（2015 年 5 月 2 日配信 <http://www.thaich.net/japanstars/dish.htm>）が報じている。

次に映像（テレビ・映画）・舞台出演では、所属事務所の諸グループのプロモーション番組である「超×D」「超DプリカスZ」のほか、DISH// 初の冠番組として中京テレビ「DISH// だし」（2014 年 4 月～9 月）があり、後出のボーイメンと同じように東京と名古屋の双方に売り出しを掛けているのは興味深い。それから、現在放映中のテレビ埼玉の音楽情報番組「HOT WAVE」は冠番組ではないが、レギュラーとして出演している。映画に関してメンバー全員での出演作はまだないが、TAKUMI は「あやしい彼女」（2016 年 4 月）などをはじめとして俳優・北村匠海として活躍しており、2017 年 2 月には注目作「君の隣臓をたべたい」が公開を控えているほか、TBS のテレビドラマ「仰げば尊し」（2016 年 7 月）の出演は記憶に新しい。最近では RYUJI も俳優・小林龍二として「サバイボマスク」（2016 年）に出演し、舞台では MASAKI こと矢部昌暉が朗読劇「僕とあいつの関ヶ原」（2016 年 7 月 7 日～9 日）に出演するなど、それぞれに持ち味を生かした活動を展開している。

宣伝方式に関して、いわゆる紙媒体への掲載は『EbiDan』『BOYS ON STAGE』ほか一定の雑誌（参考文献 [雑誌] を参照）に集中しており、SNS ではブログ（当初のアメーバから現在は LINE へ移行している）の活用、そして YouTube チャンネルの開設なども従来型には見られない動きとして注目に値する。LINE ブログではライブ、イベント出演の告知や実際の様子（楽屋、リハなども）からプライベート風の内容まで非常に多岐に渡った情報が時々刻々とアップされることは、従来型とは対照的な意味でファンに与える親密性の心理的効果は絶大なものがあると言えるだろう。

2 超特急

超特急の公式 HP から略歴とメンバー構成を一部整理して、次に引用する。

史上初！メインダンサー & バックボーカルグループ。ダンサーのカイ（2号車）、リョウガ（3号車）、タクヤ（4号車）、ユーキ（5号車）、ユースケ（6号車）、ボーカルのコーイチ（1号車）、タカシ（7号車）からなる7人組。2011年12月25日結成、2012年6月10日にシングル「TRAIN」でCDデビュー。これまでにシングル10枚、ウルトラマンギンガとのコラボユニット「ウルトラ超特急」名義でのシングル1枚を発表、2014年12月3日には1stアルバム『RING』をリリース。アルバム & シングル合わせた9作品が、オリコンウィークリーチャート 連続TOP10入りを果たしている。エンタテインメント性の高いパフォーマンスと、<8号車>と呼ばれるファンとの一体感ある参加型ライブが話題を呼び、2015年春の東名阪ホールツアー、夏の5大都市9公演の全国ライブハウスツアー全てソールドアウト。9月9日発売のマーティン・フリードマンをフィーチャリングした10thシングル「Beautiful Chaser」は北川景子主演フジテレビ系木曜劇場「探偵の探偵」の主題歌に起用され、12月23日・24日には<東京国立代々木競技場 第一体育館>で行われた単独2Daysライブをソールドアウト、大成功に収めた。2016年3月2日に発売される最新シングル「Yell」は、現在放送中の遠藤憲一と渡部篤郎のダブル主演関西テレビ系「お義父さんと

呼ばせて」の主題歌に起用されている。春には全国 14 都市 16 公演を周る大規模ツアーを開催し、CD デビュー 4 周年となる 6 月 10 日に＜パシフィコ横浜 国立大ホール＞でファイナルを迎える。

コーイチ	1 号車 /BACK VOCAL/ お父さん担当	1994 年 6 月 18 日生まれ	奈良出身
カイ	2 号車 /MAIN DANCER/ 神祕担当	1994 年 9 月 27 日生まれ	神奈川出身
リョウガ	3 号車 /MAIN DANCER/ ガリガリ担当	1994 年 10 月 23 日生まれ	神奈川出身
タクヤ	4 号車 /MAIN DANCER/ 筋肉担当	1994 年 11 月 24 日生まれ	東京出身
ユーキ	5 号車 /MAIN DANCER/ ドジっ子担当	1995 年 1 月 2 日生まれ	徳島出身
ユースケ	6 号車 /MAIN DANCER/ 元気担当	1995 年 12 月 24 日生まれ	神奈川出身
タカシ	7 号車 /BACK VOCAL/ 末っ子担当	1996 年 9 月 23 日生まれ	大阪出身

パフォーマンス・スタイルについては、「メインボーカル」と「バックダンサー」という J-Pop のグループ・アーティストの通念からすると、超特急の「メインダンサー」と「バックボーカル」という組み合わせは珍しく、しかもメインダンサーのセンター（を務めるメンバー）がシングルが発売に合わせて毎回変化することや、メンバーそれぞれの個性に合わせたイメージカラーが設定されていることも特徴的である（コーイチ＝黒、カイ＝青、リョウガ＝紫、タクヤ＝緑、ユーキ＝赤、ユースケ＝黄、タカシ＝白）。

そして、コスチューム関連ではメンバーが曲のキャラクターに合わせた扮装をすることもデビュー当初からの特徴の 1 つで、例えば、「POLICEMEN」ではタイトルそのままにメンバー全員が警察官に、「Bloody Night」ではバイパイアとなり、その姿は CD のジャケット写真に収められている。最近でも、10 月 22 日の『PERFECT HALLOWEEN2016』（横浜アリーナ）、同月 29 日の『めざましテレビ PRESENTS T-SPOOK』（東京・お台場）、同月 30 日の『日テレ HALLOWEEN LIVE2016』で、それぞれジブリのキャラクター、ピクサー映画（アニメーションを得意とするアメリカの映画会社の諸作品）、歴代のアメリカンヒーローの仮装というように、「何にでも化ける」というその魅力が遺憾無く発揮されている。

ライブその他でのファンとの関係性については、アイドルグループのファンにありがちな間断のない歓声ではなく、メンバーとファンとの間で定型化されたコールアンドレスポンスが行われている点もユニークである。映画「サイドライン」の主題歌「HOPE STEP JUMP」の使用に際して、動画共有サイト「ニコニコ動画」でファンからコールのアイディアを募集し完成したものを、ファン 4000 人を集めた「大録音会」と称するライブで一緒に録音し、同録音は映画の主題歌として流れたほか、大録音会に参加したファンの名前をエンドロールのクレジットに入れたことも従来型では考えられない手法である。

超特急の楽曲提供者は、前山田健一や小室哲哉も含みながら多彩な人材が集められており、そこには独自の音楽スタイルの構築を目指して音楽的多様性を積極的に追求する姿勢が反映されているといえるだろう。実際、シングル曲の変遷を追ってみると、デビュー後数年にもかかわらず、とにかく毎回スタイルに多彩な変化をつける工夫が明らかに感じ取れる。その点について、雑誌掲載の

インタビュー（『BOYS ON STAGE vol.2』 pp.74-77）中の彼ら自身の発言を拾って迫ってみよう。

・「ikki!!!!!!」の音の斬新さについて

ユースケ「初めて聴いた時は、ゲームの世界に入ったんじゃないかって感じがしました。80年代のゲームっぽい音から始まって、Aメロに入ると江戸時代的な感じで、それがもう面白い・・・」

タカシ「僕は聴いた時に、カルチャーショックを与えられる曲だなんて感じたんです。これまでの歌でもそうなんですけど、超特急＝（イコール）カルチャーショックっていう図式がある気がして。（下略）、「・・・これまでとは違った盛り上がりができるだろうし、煽ることもできるなって感じました。」「・・・率直に言えばついに『Shake Body』を超える盛り上がりをつくることのできる曲が来たなって思いましたよね。・・・今回は僕たちの声も初めて入ったし、お客さんが聴いた時にもダンサーの声も歌に入っているから嬉しいかなって思いますね」

カイ「曲も歌詞も結構コミカルなんですけど、それとは裏腹に、超カッコ良いダンスになってますね。」「今回は忍者と歌舞伎でダンサーのパフォーマンスが2つに分かれていて。僕とリョウガが忍者なんです。それで、2番の頭の部分で忍者だけで踊るパートがあるんです・・・」

・曲の聴きどころという質問に対して

コイチ「歌っている時から、農民が立ち向かっていく感じや勇ましい感じを見せたいなって思って、歌い方に関してこそ意識したんです。男らしさが伝わるといいなと思って。ちょっと演歌っぽさもあるんですけど・・・」

タカシ「ダンサーの声ですね・・・今回はっきりと一人一人セリフがあるんです・・・ダンサーが新たにこの曲の一部として声で命を吹き込んでくれたのと、やっぱりサビですね。サビのダンスは本当に注目してもらいたいです・・・」

・「Rush Hour」について

コイチ「朝のバタバタしている感じがすごく見えてくる中にスピード感がある曲なんです。」「僕が一行歌うと次はすぐタカシが歌って・・・っていう風になっていて、そこでもスピード感が出るし、ライブでの武器になる曲だと思いますね」

タカシ「この曲は、通学・通勤がテーマなんですけど、‘学生な超特急’というイメージで聴いてくれるといいですね」

PV および CD 付録の DVD は DISH// と同様、映像的に面白い（「バットマン」など）。例えば YouTube にアップされている「YELL」の PV はテレビドラマ「お義父さんと呼ばせて」のタイアップ（エンディングソング）だが、若いカップルが結婚し、出産、父親の死を迎えるまでを描いた内容にメンバーによるダンスが挿入されて、全体に物語性を帯びた音楽作品に仕上がっている。音楽は聴取による鑑賞が基本ではあるが、そうした具体的な映像が付されることによって楽曲イメージの幅を広げる可能性が示された好例であると言えよう。「Beautiful Chaser」の PV は音楽作品というより、音楽が付随的な意味合いと思われるほど映像作品としての色彩が強いものに仕上がっている。フジテレビ系「探偵の探偵」のタイアップソング（主題歌）だが、ダークなイメージで歌よりもダンスが印象的に作られている。アニメ「遊☆戯☆王 ARC-V」のオープニング・テーマ「Believe × Believe」は、文字通りアニメのイメージを 3 次元で表現した作風となっている。ライブおよびメディア出演については、超特急も DISH// と同様に、男性客限定のライブを 2015 年 3 月 14 日（ホワイトデー）に行っている。「BULLET TRAIN BOYS GIG VOL.01 ～その LINK を RING せよ!! 間違っ

ちゃったホワイトデー男祭り!! DESEO」は映画館でのライブビューイング(男女ともに入場可能)も実施されて、ライブ会場の様子は CD「スターダスト LOVE TRAIN」の付録 DVD に収められている。超特急も学園祭に積極的に出演し、地道にファンの開拓を行っていることが窺えるほか、海外関係では初の写真集をマレーシアで撮影したことが評価されて、マレーシア政府観光局から感謝状が贈られた(2015年12月21日)。そして、海外初ライブとしてインドネシアに開通した時の様子を音楽ナタリーが次のように伝えている(<http://natalie.mu/music/news/149842>)。

超特急が6月6日(現地時間)にインドネシア・ジャカルタで開催されたライブイベント「COUNTDOWN ASIA FESTIVAL in Jakarta」に出演した。彼らが海外でライブを行うのは今回が初めて。“海外初開通”のステージに登場した7人は新曲の「スターダスト LOVE TRAIN」および「バットマン」など全6曲を披露した。インドネシア発祥のファンコートをベースにした「バットマン」では、歌詞にインドネシア語が登場することもあって会場は大きく盛り上がる。曲中には、現地の8号車(超特急ファンの総称)からコールも飛んだ(下略)。

テレビ出演は前述の「超×D」のほか、タクヤが「ウルトラマンギンガ」(テレビ東京)に出演したり、超特急の単独番組としては、一部のメンバーによる地上波の「ふじびじスクール」(毎週金曜 25:45 - 25:50)、「次なる世代 TV」(毎週金曜日 26:20-26:50)、「ムチャぶらツアー！」(CSTBS チャンネル)が現在も放映中である。メンバー全員がチア男子役で主演した映画「サイドライン」は、明らかに宣伝効果を狙った作品ながら、神社の境内での彼らのダンスが奉納芸のように映る不思議な印象を受けるユニークな作品に仕上がっている。メンバー単独ではタカシこと松尾太陽^{まつおたかし}が山崎賢人の親友役で大抜擢された「一週間フレンズ」(2017年公開予定)が要注目である。宣伝方式に関して、雑誌『TVガイド dan vol.10』に2015年12月24日、25日開催の単独ライブ「超特急 CHRISTMAS ONEMAN LIVE 2015 Fantasy Love Train~ 君の元までつながる Rail~」の DVD についてのインタビューが掲載され、別冊付録で両面刷り大ポスターも織り込まれるなど DISH// と同種の各誌で扱われている。ブログなどの SNS 活用状況は DISH// と基本的に同じである。

3 ボイメン

ボイメンは前記の2グループにも勝るとも劣らないほど猛烈な勢いで活動を展開しており、略歴、メンバー構成をボイメンの公式 HP より引用すると次ようになる。

2010年に結成された東海エリア出身・在住のメンバーで構成されたユニット。現在、東海地方を中心にテレビ・ラジオのレギュラーは10本以上と幅広く活躍中。歌・ダンス・芝居だけでなくミュージカルなどもこなすエンターテイメント集団。2015年2月28日に愛知県・日本ガイシホールで万人ライブを敢行。テレビ東京系列アニメ『遊☆戯☆王 ARC-V』の主題歌『ARC of Smile』でオリコン初登場3位、ウィークリー6位にランクインし、業界を騒然とさせる。同5月よりメンバー総出演の映画「サムライ・ロック」が全国公開。2016年1月6日リリース「BOYMEN NINJA」、2月3日リリース「Wanna be!」ではオリコンデイリーチャート、ウィークリーチャート共に初登場1位獲得。東海エリアを代表する男性グループとして話題となっている。

現在のメンバーは水野勝 田中俊介、田村侑久、辻本達規、小林豊、本田剛文、勇翔、平松賢人、土田拓海、吉原雅斗の10人で、「YanKee5」と「誠」という2ユニットで構成されている。YanKee5（ヤンキーファイブ、略称はヤンファイ）は「ミュージカル『ホワイト★タイツ』で不良役を演じた水野、田中、田村、辻本、小林から成るユニットで、役のイメージに合わせた男らしい楽曲が多い。誠はBOYS AND MENの年少組である本田、勇翔、平松、吉原から成るユニットで、彼らの「爽やかで硬派な好青年」のイメージを反映させたポップな楽曲が多い。彼らは、華麗な學ランを着用して男気溢れる雰囲気の基本としつつ、ボイメン体操から舞台、ミュージカルまで自前で行い、さらには女役を演じるという男性版宝塚的側面もあり、極めて多彩なパフォーマンス・スタイルを特徴としている。衣装とヘアスタイルなどボイメンの変遷は雑誌『ボイメン Walker』のpp.64-83にビジュアルヒストリーとして写真と年表でまとめられている。CD/DVDおよび楽曲については、『ボイメン・マガジン』p.143にBOYMENHISTORYの一覧表があり、それによると2016年1月6日の「BOYMEN NINJA」オリコンデイリー1位、2016年2月3日の「Wanna be!」オリコンデイリー、ウィークリー共に初登場1位、2016年8月24日「Yamato ☆ Dancing」がオリコンシングルデイリー1位というように2016年以降CDヒットチャートでも急速に勢いを増していることが分かる。そして、2016年11月はAsia Artist Awards（韓国およびアジアで多くの人気を得たK-POPアーティストと韓国の俳優、アジアのアーティストに与える賞）歌手部門のライジングスター賞および第58回日本レコード大賞新人賞の受賞、読売テレビのベストヒット歌謡祭への出場とその勢いはさらに加速中である。特に韓国で行われたAsia Artist Awards授賞式への出演（新曲の「Yamato ☆ Dancing」を披露）によって、日本よりグローバル化が進展しているK-Popや中華圏ポップスの最先端のアーティストたちのステージを目の当たりにして得た経験がどう生かされるか、彼ら自身はもとよりJ-Popに巻き起こす新風も期待される。

ライブおよびメディア出演では、中京テレビの番組が数多いが、ドラマ「白鳥麗子でございます」は関東圏でも放映され、テレビと映画の双方に進出している。そして、最近では中京テレビの諸番組が関東のケーブルテレビなどで放映されているほか、インターネットでの視聴が可能になっている。映画出演は前出の2グループより多く、「サムライロック」（2015年）と「白鳥麗子でございます」（2016年）は全員、「隣寸少女」（2016年）は小林豊、本田剛文が出演し、結成から今までの歩みを自らが演じた最新作の「BOYS AND MEN One For ALL, All For One」（2016年）には現在のメンバー10人が総出演している。海外進出では中京テレビのレギュラー番組「ボイメン MAGIC ～夜の魔法をキミに～」がタイでも放送されており、同国にちなんだ楽曲「サワディ音頭」も発表して、2016年2月20日にはバンコクのスカラシアターでのワンマンライブを成功させるなどタイでの各種イベントに数多く出演している。そして、その人気の高さは雑誌掲載にも直接反映されている。『EbiDan』と同様に自らの所属事務所による雑誌として創刊された『BOYMEN MAGAZINE』は1グループをフィーチャーしている点で月刊『EXILE』を思わせる。LINEにブログはまだ開設されていないが、SNSを重要している点は同様で、綿密かつ大胆なプロモーションが進行中であることが感じ取れる。

4 結論

従来の男性アイドルグループと比較した場合の新型の革新的要素を要約して以下に記す。

- ・3グループとも従来型のアイドルにありがちな、いきなりメジャーデビューではなく、インディーズを経て、東京、名古屋にベースをしっかりと固めることから始めている。
- ・メディア関連で、テレビ出演は地方局+メイン局の深夜が中心^{注1}だが、従来型のようなメジャーな雑誌に依拠するのではなく、PVの積極的公開(YouTube)、LINEなどのSNSを重視している^{注20}。
- ・グループのイメージキャラは、従来型の優等生に対して仮装や変顔も辞さないコミカルさや男気は単純な優等生から脱却した姿勢が感じられる、
- ・従来型に比して総合的に歌唱力・ダンス・演技力がレベルアップしている。
- ・ファンとの親密な関係性を基本とする宣伝方式として、CD購入の特典である握手会や好きなメンバーとの2ショット撮影などが設定されている点は、従来型との大きな相違点として注目される。
- ・海外進出(特にアジア)に積極的に実績を積み上げつつある。

以上のように男性アイドルグループを広範囲に見れば、従来型と新型がそれぞれ各方面で棲み分けしているように見えるが、このまま単純に二極化が進行して一方が他方を呑みこむのか？ 併存状態が継続した場合、アイドルイメージの多様化の方向へ進むのか？ 今後の動向から目が離せない。アニソン、2.5次元ミュージカルを両輪に声優・舞台俳優たちの音楽活動(グループ、ユニット)の展開や特撮ヒーローのテレビ番組でも歌やダンスが挿入されるなどの新しい状況を迎えているが、それは一朝一夕に形成されたのではない。その背景には同類の先輩、同輩、後輩グループとしてw-inds、Lead、PaniCrew、RUN&GUN、FLAME、D☆DATE(D-BOYS)、Pureboys、X4、10神らの存在があり、さらにDISH//、超特急の所属事務所の後輩、PrimaX、カスタマイZらも控えている。

従来型アイドルのスタイルを標榜しない諸グループの出現は、(男性)アイドル(グループ)戦線はもちろん、J-Pop、ミュージカル、演劇、映画の硬直化した状況に大きな地殻変動をもたらす可能性が感じられるという意味で、従来型に対する「画期的な挑戦」であると言えるだろう。おそらくその根底には従来型に飽き足らなくなった音楽ファンの支持があり、それが新型やK-Popへの興味関心につながった可能性も考えられよう。そうした大衆音楽芸能の新しい状況の中、活発な活動を展開し、実績を挙げている新型男性グループが大手マスコミにほとんど取り上げられていないことに対して、マスメディアの虚実、報道の不正性も指摘されねばなるまい。「ミュージックステーション」やテレビで放映される音楽祭には未出演で、メイン局での出演は早朝または深夜に集中しているのが実情である。しかし、それが悲観的な見方に直結するものではないことは、彼らの広範囲に及ぶ活発な活動が証明している。そういう意味で、彼らの多様な活動、多元的状況、総合/統合的志向を視野に入れて、その文化的意義をより深くとらえるには楽曲分析主体の音楽(人

類)学、社会学に偏向するポピュラー音楽研究、音楽との関わりに消極的な映像人類学、演劇学などといった日本の既存のタコツボ型学問体系ではもはや対応不可能ではないだろうか？

「非アイドル」と称する新型の男性グループアーティストの独自性をどこに見出すか？ 各グループ自身がまだ発展途上の段階なので、確固たる結論を下すのはまだ少し先になるだろうが、とにかく男性グループアーティストのイメージが大きく変わろうとしていることは確かで、このままでは従来型は地上波 TV の凋落とともに消滅する可能性も否定できないだろう。すなわち、変革精神の乏しい、明確な戦略のない組織・個人の衰退・消滅は必定であり、進取の気性なくただ「ゲージュツ」という権威に胡坐をかいているだけの教育機関も同様の運命をたどることが予想される。

今回、研究対象とした3グループに代表される革新的なアーティストたちは、非アイドルというより、アイドル系、もしくはアイドルの流れを汲む実力派グループ、さらにはボイメンの公式HPの略歴にあるように「エンターテインメント集団」という包括的な概念が相応しいように思われる。よって、その姿を的確にとらえるには、タコツボ型の専門性に隷属しないリベラルアーツの観点からのアプローチが不可欠であり、そのように考えると DISH//、超特急、ボイメンは単なるマルチタレントや看板倒れのクロスオーバーアーティストではなく、「自由芸能者 (Liberal Artistic Entertainer)」と命名すべき、何某の技能を核として広範囲なジャンルに渡って専門的な奥義を極める芸能界のイノベーターということができるだろう。



写真1 超特急のライブ開場前の様子 (2016年12月24日)



写真2 DISH//のライブ会場前の様子(2017年1月1日)



写真3 BOYS AND MENのライブ会場前の様子(2017年1月7日)

註

注¹ 超特急のLINEブログ(2016年11月18日21:00)で11月25日21:00放送のテレビ朝日「金曜ロンドンハーツ」にタクヤが単独でゴールデン時間帯に初出演するニュースが報じられている。

注² ネットの活用に関しては2015年3月1日9:40アップのORICON STYLEの記事「テレビに“消費されない”男性アイドルたち(斉藤貴志)」の一文が参考になる (<http://www.oricon.co.jp/news/2049282/full/>)。

参考文献

[文献1 (雑誌類)]

- 『BOYS ON STAGE vol.2 (エンターブレインムック別冊 CD&DL で一た)』 KADOKAWA、2015年3月
『BOYS ON STAGE vol.3 (エンターブレインムック別冊 CD&DL で一た)』 KADOKAWA、2015年7月
『BOYS ON STAGE vol.4 (エンターブレインムック別冊 CD&DL で一た)』 KADOKAWA、2015年11月
『BOYS ON STAGE vol.6 (エンターブレインムック別冊 CD&DL で一た)』 KADOKAWA、2016年7月
『BOYS ON STAGE vol.8 (エンターブレインムック別冊 CD&DL で一た)』 KADOKAWA、2017年3月
『BOYS ON STAGE vol.10 (エンターブレインムック別冊 CD&DL で一た)』 KADOKAWA、2017年7月
『BOYMEN MAGAZINE Vol.1』 Sweet Think Omelet、2016年5月25日
『click clap!! 2016 MAR Vol.8』 カレイドスコープ社、2016年1月20日
『click clap!! 2016 NOV Vol.12』 カレイドスコープ社、2016年9月20日
『EBiDAN vol.1』 スターダスト音楽出版、2013年12月3日
『EBiDAN vol.5』 スターダスト音楽出版、2015年3月29日
『TV ガイド dan vol.10 EARLY SUMMER』 東京ニュース通信社、2016年5月19日
『TV ガイド dan vol.11 SUMMER』 東京ニュース通信社、2016年7月26日
『TV ガイド dan vol.12 AUTUMN』 東京ニュース通信社、2016年10月22日
『W! vol.6 (廣済堂ベストムック 304号)』 廣済堂出版、2015年8月1日
『ボーイメン Walker』 KADOKAWA、2016年2月25日第2刷

[文献2 (単行本)]

- 円藤都司昭『ソーシャル化する音楽「聴取」から「遊び」へ』 青土社、2013年3月15日
瀬木比呂志『リベラルアーツの学び方』 ディスカバー、2015年5月30日
高増明『ポピュラー音楽の社会経済学』 ナカニシヤ出版、2013年12月25日